研究課題　史料編纂所所蔵明清中国公文書関係史料の比較研究

研究経費　五〇万円（前年度よりの繰越分）

研究組織

　研究代表者　　　渡辺美季（東京大学）

　所内共同研究者　須田牧子・黒嶋敏・岡本真

　所外共同研究者　荒木和憲（国立歴史民俗博物館）・辻大和（横浜国立大学）

研究の概要

（１）課題の概要

　東京大学史料編纂所には、明清時代中国の公文書ならびにその関連文書が複数所蔵されている。それらは中近世東アジアの国際関係を読み解く際の貴重な史料であり、中近世日本における中国公文書の社会的価値を具体的に検討し得る好素材でもある。すでにある程度、基礎的データの作成や国内の類似文書のデータ集成が進められているが、これらの文書を古文書学的に位置付けるためには、明清国内における形式・作成・発給過程についての制度的研究と、実際に発給された類似文書との比較検討が不可欠である。  
そこで本研究ではこれらの文書について、二〇一九年度一般共同研究に引き続き、①形式・作成・発給に関わる中国側の諸規定の調査を進め、②それらの規定と編纂所の所蔵史料とを対照した上で、③韓国の国立中央図書館・韓国学中央研究院において明清中国から朝鮮に発給された類似文書（原本）との比較検討を実施する。これにより、規定と実態の両面からそれらの文書の古文書学的位置づけを明らかにし、東アジア地域で共有し得るレベルでの「史料の研究資源化」を目指したい。

（２）研究の成果

　韓国調査が出来なかったのは残念だが、コロナ禍を逆手にとって研究計画を大きく見直し、成果報告書の作成・刊行に注力した。報告書掲載の諸史料については、当初予定していたよりも広い視点から多くの論点を掘り下げることができ、編纂所所蔵の明清公文書の史料学的位置づけを、いっそう明らかにすることができた。これには日本・琉球・朝鮮史を専門とするメンバーに加え、海外研究協力者である林慶俊氏（韓国・東北大学）・劉序楓氏（台湾・中央研究院）の多大な協力を得たことで、同時代東アジア諸国の発給文書をより複眼的な視野で見通すことが出来たことが大きい。また刊行にあたって、東京大学史料編纂所研究成果報告書として支援を得たことにも謝意を表する。  
カラー版の鮮明な図版を伴う成果報告書は、明清公文書の専論として類例が乏しかったこともあり、幸いにも好評を博した。また、国際的な成果発信の一助とするべく英語・中国語・韓国語の要旨を付しており、オンラインで公開したことにより、世界中どこからもアクセスできるようにした。これにより本研究成果の国際的な活用が期待される。